優秀賞

おばの優しさ

埼玉県　植竹中学校　二年
大友　遼馬

ぼくの伯母（おば）は重度の知的障がい者だ。身長は１４０センチぐらいの小さめで、動きも普通の人にくらべて遅い。伯母は、近所の祖母宅で暮らしている。家の中にいるときは、座っていることが多い。そんな伯母を家族みんなでサポートしている。

ぼくは伯母と散歩によく行く。散歩といっても、近くのスーパーへ買い物に行くことが多い。外出するときは、手をつないでゆっくりと一緒に歩いてあげている。歩くのが遅いなと思うけれど、いつもあまり感情を表情に出さない伯母が楽しそうにしているのを見ると、ぼくも「良かった」と嬉しい気持ちになる。

伯母は、勉強はあまりできない。そこでぼくは、紙に漢字の問題や計算問題を作って書いてあげている。問題といっても家族の名前を漢字で書かせるものだったり、小学校低学年レベルの計算問題だ。「やってみて。」と言うと、「うーん。」と言いながら一生懸命に考えている。

決して字も上手くないし、全問正解なんてできないけれど、少しでも正解していたら、たくさんほめてあげている。ぼくはこれで伯母の脳が少しでも活性化されたり、おとろえるのが遅くなってほしいと願っている。

問題を解かせる以外にも、一緒に折り紙をしたり、バドミントンをしたりしている。伯母はやっぱり上手にはできない。いやがって、動きが止まってしまうこともよくある。そんなときは、ぼくはゆっくりとやり方を教えてあげている。何度も同じことを教えることもあるけれど、それでも少しでもできるようになってくれたらとても嬉しい。

ぼくは伯母といると、いつの間にかとても心が穏やかな気持ちになっている。叔母はいつの間にか、折り紙で鶴を折れるようになり、ぼくに持ってきてくれた。心はちゃんと伝わっているのだ、と感じた。ぼくが何かしてあげていると思っていたけれど、伯母からもぼくは温かい何かをもらっていた。

「親切にしてあげる」と意識して動くことはもちろん大切だ。けれど、意図しなくても「いつのまにか相手のためになっていた」ということもあると思った。伯母はそんなささやかな「親切」を、いつもぼくにくれていた。

伯母はどんどんおとろえていくけれど、いつまでも純粋な伯母でいてほしいし、ぼくのことを忘れないでほしいと願う。

これからもぼくは、伯母のために問題を作り続けるし、たくさんのことを一緒に楽しみながらサポートしていこうと思う。